

## 「この奥義は偉大です」エペソ5：28-32 堀田修一 20・9・6

I 「同様に夫たちも、自分の妻を自分のからだのように（自分のからだとして）愛さなければなりません。自分の妻（自分の妻は、夫と一体とされた大切な存在）を愛する（大切に作る）人は自分自身（夫と妻は分離することが出来ない一体の存在だから）を愛している（大切にしている）のです（自分を健全に愛する、大切に出来ない人は、人を愛したり大切にできない）。いまだかつて自分の身を憎んだ人はいません。むしろ、それを養い育てます（自分の身に必要な栄養、憩いを与える）。キリストも教会に対してそのようになさるのです」：28-29。キリストもご自分と一体とされた大切な存在として、ご自分の花嫁である教会を大切に、養い育てられる。成長させられる。霊的な栄養のみことば、御聖霊の新しい命、愛の訓練、休むべき時には休ませる事等を通して。主は、私たちが救われて終わりではなく、主のからだ（教会）と一体とされ、霊的に養い育て続けて下さる素晴らしいお方。「教会はキリストのからだであり、すべてのもので満たす方が満ちておられるところです」エペソ1：23。教会は、キリストの満たしをもって、完全にされる。「みことばは、あなたがたを成長させ」使徒20：32。みことばには、私たち教会を養う命がある。「わたしを通して入るなら（主を信じるなら）、救われます。また、安らかに出入りし、牧草（霊的な糧のみことば）を見つけます。…わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。…良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」ヨハネ10：9-11。

「あなたがたは、すべての悪意、すべての偽り、偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な霊の乳（みことば）を慕い求めなさい。それによって成長し、救い（義認・聖化・栄化）を得るためです。」Iペテロ2：1-3。

II エペソ5：21-33は、夫と妻の関係だけではなく、キリストと教会の関係を教えている大切な箇所。キリストの花嫁として、主の教会の一員として、私達を待ち受けている姿を示す27節は素晴らしい。しかしもっと素晴らしい恵みが、30-32節に記されている。それは「キリストと教会との神秘的結合」という驚くべき恵み！私達が、結婚の意味が本当に分かるのは、キリストと教会の神秘的結合の教理を理解した時。「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである」：31→「この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです」：32とある。それゆえ、祈りと御聖霊だけが与えて下さる霊的な理解力が与えられなければ、この奥義は理解は出来ない。キリストは、天の父のみもとを、離れ、地上に降りて来られ、私たちの罪の為、十字架に付けられ「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになつてのですか」（マタイ27：46）と叫ばれた。その瞬間、キリストは父から離された。なぜ？それは、キリストの花嫁（主を信じる私達の集まりである教会）の罪の代価を払い救うためだった。その結果、主の花嫁である私達、教会は、主のからだの一部、主の肉の肉、主の骨の骨である。

III 「キリストと教会の神秘的結合」という偉大な奥義を理解する為に、いくつかの事を見ていきたい。「教会はキリストのからだ」という真理。「私たちはキリストのからだの部分だからです」：30。教会は、キリストの一部分。体の各部分が体の一部であり、体の中の頭が中心的な存在であるように、キリストは教会のかしら（原語：頭、基礎の石）。「また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです」1：23。キリストと教会の神秘的結合が教えられている。更に本日の30節で「私たちはキリストのからだの部分だからです」とある。最も信頼できる写本には、「私たちは、キリストのから

だ、すなわち、彼の肉と彼の骨の部分だからです（創世記2：23参照）」とある。これは、キリストと私達の関係、結合が、命のみなぎった有機的な結合を確信させる。私達が、キリストの霊的な肉や骨をとり、キリストのからだ、すなわち、主の霊的な肉と骨の部分とされる。アダムはエバについてこう言った。「これこそ、ついに私の骨からの骨（一つの肉に由来する人格の本質に基づく親近感）、私の肉からの肉」（創世記2：23）。パウロは、明らかにアダムとエバの類比をキリストと教会に当てはめている。それ故、教会のことを、「私たちは彼のからだの、すなわち、彼の肉の、彼の骨の部分です」と言う。もっと奥義の意味を理解して行きたい。その答えは、女が男から取られたという事。なぜエバは、「女」と呼ばれるのか。それは、女（ヘブル語：イッシャー）が「男（ヘブル語：イーシュ）から取られたのだから」（創世記2：23）。従って、女の定義は「男から取られた者」という事になる。それが「女」という言葉の意味。神が男を造られた後、言われた。「人がひとりであるのは良くない（キリスト者もひとりであるのは良くない。だから、私達は、教会に所属し、互いに交わり祈り合い支え合う）。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう」（創世記2：18）。動物が造られたが、人にとって相応しい助け手ではなかった。人は特別な被造物であり、動物から進化したものではない。人間だけが、神のかたち（神の御性質、神と人と人格的な交わりができる）に似せて造られた。アダムは、鳥や動物の中に深い交わりが出来る相応しい助け手を見つける事ができなかった。そこで、神は「深い眠りを人に下された。それで、人は眠った。主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。神である主は、人から取ったあばら骨を一人の女に造り上げ、人のところに連れて来られた」（2：19-22）。男は深い眠りに置かれ、それから創造の業がなされた。男の一部分が取り出され、それで女が造られた。深い眠りがアダムに下った。深い眠りがキリストの上に下った。主は、霊を御父に委ね、息を引き取られた。そのみわざから、教会がとられた。女はアダムの脇から取られ、教会は、主の傷ついて血のにじむ脇から誕生した。「この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです」：32。教会は、どのようにして存在するようになったか。神が第二の人、最後のアダム、ご自分のひとり子、愛する御子に対して十字架でなされた業の結果。深い眠りがアダムに下った。深い眠りが御子に下った。主は霊を御父に委ね、息を引き取られた。その御業から、教会が取られた。女がアダムから取られたように、教会はキリストから取られた。女はアダムの脇からとられた。教会が出て来るのは、主の傷ついて血のにじむ脇から。「兵士の一人は、イエスの脇腹を槍で突き刺した。すると、すぐに血と水が出て来た」ヨハネ19：34。これは、ゼカリヤ13：1の「罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる」の成就。それが教会、花嫁の誕生の始まり。「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。そのうち傷のゆえに、あなたがたはいやされた」（Ⅰペテロ2：24）。教会は「彼の肉、彼の骨の骨」。「この奥義は偉大です」。主は、新しい人間性の形成者。Ⅱペテロ1：4で、私達が「神の御性質にあずかる者」とある。肉体を取られ、救いのわざを成し遂げられた仲保者キリストが、現在持っておられる性質に私達はあずかる者。私達は主から自分達の命、ご性質を受け続けている。何という恵み！正に、主の一部分、一体とされている！「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマ（聖霊のバプテスマによる結合）によって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのち（キリストと霊的に結合しキリストからいただく新しい命）に歩むためです」ローマ6：4。

祈り：私達は、キリストの十字架で負われた傷の部分に接がれ、一体となり、そこから霊的な養分（新しい命、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制）をいただいている恵みを心から感謝します。